

浅井雅志著 『モダンの「おそれ」と「おののき」』 松柏社 (2011)
『持続するエピファニー』 松柏社 (2016)

中川 吉晴 同志社大学*

Asai, "Fear" and "Trembling" of Modern Times:
Diagnoses and Prescriptions for Modern Chronic Diseases

Asai, *Sustained Epiphany:*
Literary Representations of the Erotic and the Spiritual

NAKAGAWA Yoshiharu



浅井雅志先生（京都橘大学）はイギリス文学を専門とし、とくに作家 D. H. ロレンスの研究者として知られている。トランスパーソナル心理学との関係では、グルジェフにかかわる翻訳でよく知られている。2013 年度の本学会学術大会では「トランスパーソナル心理学の源泉としてのグルジェフ」というタイトルで講演をしていただき、本誌に寄稿をしていただいた。浅井先生の手になる翻訳としては、ウスペンスキー『奇蹟を求めて』、グルジェフ『ベルゼバブの孫への話』『生は〈私が存在し〉て初めて真実となる』、ムーア『グルジェフ伝』（いずれも平河出版社刊）がある。これらはいずれも偉業と呼べるような卓越した翻訳であり、それらをつうじて私自身もグルジェフやウスペンスキーのことを知り、大きな影響を受けてきた。

浅井先生は 800 ページに及ぶ大著『モダンの「おそれ」と「おののき」——近代の宿痾の診断と処方』のなかで、広範な文学・思想研究をもとに「モダン」の総体の根底にあるものを問い直す。それは、理性、意識、自意識をもつ近代的人間像であり、脱魔術化された合理性の精神である。啓蒙の時代であるモダン（近代）は、人間の合理性をこのうえなく高く評価したた

め、同時に、生からは伝統的な価値観がはがれ落ち、生は無意味で、無価値なものにされてしまった。私たちは、合理性と科学技術がもたらした豊かな産物に浸って生活をしているが、精神的には意味の枯渇した空虚な砂漠に生きている。これを浅井先生は、私たちが引き受けなければならない「近代の宿痾」と呼ぶ。

『モダンの「おそれ」と「おののき」』は五部構成、全 22 章である。第一部「近代の宿痾の兆候と診断」、第二部「理性の『不幸』、肉体の『幸福』」、第三部「霊性への超越」、第四部「文化への『回帰』」、第五部「死への先駆」となっている。とりわけその第三部までを中心に、19 世紀末から 20 世紀にかけて、はじめてモダンの問題に本格的に向き合うことになった文学者や思想家、すなわち D. H. ロレンスをはじめ、T. E. ロレンス（アラビアのロレンス）、ニーチェ、ウェーバー、イエイツ、ハイデガー、ユング、ヘッセ、カザンツァキスなどが取り上げられ、これらの人びとがモダンの問題とどのように格闘し、打開策を模索していったのかが詳しく論じられている。文学作品の丁寧な分析をつうじて議論が展開されるので、作中人物の紆余曲折や心の機微までが語られ、問題の複雑な様相が描き出される。テーマも、イエス、キリスト教、エロス、性、結婚、教育、宗教など多岐に及ぶ。

* yonakaga@mail.doshisha.ac.jp

その謎めいた人物像から容易に論じることのできない二人のロレンスを扱ったいくつかの章は圧巻であり、内容の濃い興味深い議論が展開されている。実際、本書の全体は、D. H. ロレンスに関する多年にわたる本格的研究を軸にして構成されている。また本書のなかでは、グルジェフとウスペンスキーは当然ながら、ブレイク、ブラヴァツキー、シュタイナー、さらに、オルダス・ハクスレー、コリン・ウィルソン、三島由紀夫、井筒俊彦、バタイユ、サイード、ラッセル、フーコーも重要な考察対象になっている。ケン・ウィルバーは要所要所で登場し、「前／超の虚偽」をはじめとするウィルバーの諸概念が有効な分析装置として使用されている。このように本書は、数多くの作家や思想家、心理学者を織り交ぜながら、読み応えのある作品になっている。

しかし、なにぶん大著であるため、本稿ではとくに第三部からトランスパーソナル心理学に関連のある箇所を少しだけ見ておきたい。第11章「『自発性』という名のカルト——ロレンスとオカルト」では、19世紀から20世紀にかけて、実証主義的な科学的な世界観の浸透に対抗してオカルトへの関心が高まったことを背景としながら、D. H. ロレンスがどのようなオカルト観、スピリチュアリティ観を抱いていたのかが明らかにされる。ここではウスペンスキーの『ターシャム・オーガナム』をロレンスが読んだ際に、ロレンスがその本に書き込んだメモ書きの分析から考察が展開される。ロレンスはウスペンスキーと大差ない方向性を有していたにもかかわらず、ウスペンスキーに強く反発したという。ではロレンスのオカルト観とはどのようなものだったのか。まとめの部分のみを引用すると

人間の中枢には「純朴な核」があり、これによって人間は生と宇宙に「驚異の念」を

もって接することができる。そこから生じるであろう四次元的意識は人間が「自発的に」生きることを保障するものであった。ところが、「おぞましいリンゴ」が「別種の知」を人間に植えつけたときから人間の意識は「血の意識」と「頭脳／知的意識」に分裂し、「自発的に」生きることを妨げるようになった。これを回復するには、これまで「知的意識」が抑圧してきた「血の意識」、そしてその人間における代表的な表出である性を基軸にして男女関係・人間関係を正常化しなければならない。それができれば、「宇宙と胸と胸とを突き合わせて」生きる生の様式、すなわち「四次元」における生を取り戻すことができるであろう。（pp. 437-438）

ロレンスがウスペンスキーに反発したのは、ウスペンスキーが「知的意識」の重要性を強調していたからである。ロレンスの場合「意識に支配されていることこそ問題なのに、その意識を使って問題が解決できるはずはない、というのが彼の見方である。そのため彼は、肉体、性といった、西洋の歴史においては光としての意識が常に闇の中に閉じ込めてきたものに突破口を見出そうとする」（p. 435）。ここで浅井先生は、やはり身体性を強調したニーチェとロレンスの共通点を指摘する。そのうえでロレンスの問題点をつぎのように指摘する。「ロレンスにおける問題は、このように『闇』の部分に問題の解決の鍵を見出そうとするとき、勢いあまって光の部分、その中央に位置する意識／知性に対する見方が極端に否定的になることである」（p. 435）。

浅井先生はウィルバーのいう「前／超の虚偽」を引いて、「ロレンスは、『血の意識』＝本能や直感、すなわち『前合理的』な知の状態に従って行動するあり方を『自発的』と呼んで称揚す

るが、その称揚はしばしば『超合理的な状態』への称揚とないまぜになっているのだ』（pp. 439-440）と述べ、「血の意識」と「知的意識」の統合がロレンスのヴィジョンを具体化するうえで必要であると指摘する。

ロレンスの主張は、トランスパーソナル心理学の文脈においては、ホルヘ・フェレールのいう「身体化されたスピリチュアリティ」を先取りするものとして注目される。フェレールは論文「完全に身体化された霊的生を生きるとは、どのようなことなのか」（本誌 Vol. 12, No. 1, 2012, pp. 73-89）のなかで、「身体から切り離された」スピリチュアリティに対して、身体化されたスピリチュアリティの重要性を明らかにしているが、それは身体や本能が霊的達成の源泉になるということの意味している。これは意識や精神を無視するというのではなく、むしろそれらと身体や本能が同等のパートナーとして共に働くことを意味している。フェレールは「参与的アプローチ」の提唱者であるが、これは、身体、生命（本能、性）、心、精神、意識が統合的に共創造に参与するということである。したがって、フェレールによれば、身体化されたスピリチュアリティは「意識のエネルギーと身体の感覚的エネルギーの双方への参与的なかかわりから生じる。究極的には、身体化されたスピリチュアリティが触媒的に作用して完全な人間存在が立ち現れる。このような存在は、自分の身体、地球、内在的な霊的生に根ざしたままで、その属性のすべてが超越的な霊的エネルギーに通じている。そして他者と連帯して、自己、共同体、世界の霊的変容にかかわる」（p. 85）。このように「身体化されたスピリチュアリティ」は、単に本能や直感としての「血の意識」だけでなく、「血の意識」と「知的意識」を統合したスピリチュアリティのあり方を意味している。とはいえロレンスは、本能や性に根ざした「血の意識」をもって超越を志向

していた以上、身体化されたスピリチュアリティのひとつの原点であると言えよう。

もう一点、浅井先生の議論のなかで注目されるのは、コリン・ウィルソンを批判的に論じた第14章「ロレンス、グルジェフ、ウィルソン——楽観主義の光と影」のなかで、ウィルソンの意識拡大法が楽観主義にすぎるとはなしかと指摘したうえで、グルジェフのワークにふれて、こう述べている点である。「ウィルソンが修行というものをあまり強調しないことは、彼がいかなる生きた伝統とも直接的、本質的な関わりをもっていないことと深く結びついているように思われる。グルジェフは古代から連続と続く秘教的伝統の継承者を自称していた」（p. 499）。そしてつぎのように言う。「私には、未来に向かって精神の道を歩もうとする者にとって、生きた伝統の中に根をもつことは不可欠のように思われる。ウィルバーが、種々の面でウィルソンと共通点をもちながらも、その著書がはるかに強い説得力をもっている最大の原因はここにあると私は思っている」（p. 500）。

しかし、多くの人々が霊的伝統から根こぎにされている現代日本にあって、みずから根ざすことのできる修行方法を新たに見出すことは、どの程度まで可能なのか。決して容易なことではないであろう。しかし、ここにおいてトランスパーソナル心理学は、さまざまな方法を整理し、結び合わせ、提示することで、少なからず社会的役割を果たすことができるはずである。特定の宗教的伝統に根ざすことができない場合、それに代わるものとして「永遠の哲学」に依拠することができ、トランスパーソナル心理学は、「永遠の哲学」に即した「永遠の心理学」を描きだしているのである。

浅井雅志先生のもう一冊の著書『持続するエピファニー——文学に表象されたエロティシズムと霊性』は、『モダンの「おそれ」と「おののき』』の続編にあたる。本書の「序言」の

なかで、浅井先生はいくぶん詳しくみずからの「遍歴」を述べ、本書の成立の経緯について語っている。本書には本学会における講演も収められている。その講演は私が先生にお願いしたものであるが、浅井先生はそれをきっかけとして、「アカデミズム」と「神秘学・霊学」とを結びつけて論じることを思いついたという。本書は三部構成、全10章からなり、第一部は「エロティシズムと創造力の対位法」、第二部は「『安住の地』への帰還」、第三部は「心理学と文学と霊学の交差する場所」であるが、とくに第三部がそうした試みにあてられている。

「序言」のなかでは、ウスペンスキーが自己観察を実行したあとに発した「何と不思議な！私がこんな場所にいるとは！」というフレーズをもとに以下のように述べられている。

……ウスペンスキーは、自分が覚えているのは自己想起の瞬間だけだったと思い当たる。自分の過去を思い返してみれば誰でも、はっきり記憶に残っているのは、何らかの形で意識が研ぎ澄まされたとき、あるいは自己という存在に気づいたときだけであることは容易に見てとれる。……要するに、自分の人生で記憶に残るものは、ということとは自己の人生を構成するものといつても外的外れではないと思うが、気づき、エピファニー、覚醒、自己想起……言葉は何でもいいが、何かしら通常の平板かつ低調な意識から抜け出た、あるいは連れ出されたときの経験とその記憶だけであるといつてもいいだろう。……

もしそうであるとすれば、やるべきこと

は明らかだ。そのような瞬間を増やすことである。そうすることで、私の生の意味は何かという問いを、私はどんな意味を作り出せるかという問いに変更できるのではないか。私にとって本書執筆は、それをやる一つの過程として、以前とは別の意義を帯びてきた。そして本書の構成を考えるうちに、アカデミズム（ここでは主に文学研究だが）と霊学との接点に、この「気づきの瞬間」があることに思い当たった。(pp. 5-6)

平板な日常の流れのなかに突然生じる気づき、エピファニー（非日常的な神秘的体験）をいかに定着させ持続させることができるのが、この本のテーマである。最終章「持続するエピファニー——『気づき』から『自己想起』へ」では、多くの文学作品のなかでさまざまな覚醒の体験が描かれるが、それらに共通しているのは、その突発性、高揚感、本質直観、無時間性、融合感、受動性などであることが指摘される。これに対して霊学や神秘学は、意識の拡大や進化を説き、そのための行法を重視した。エピファニーとは、そうした拡大した意識を偶然に垣間見る経験であり、行法を欠くため長続きしない。しかし、それは高次の意識への入り口にはなりうる。

浅井先生は二冊の著書をつうじて追及してきたことを、最後にこうまとめている。「エピファニーの瞬間において、人間は真の自分の姿を垣間見ることができる。そしてそれを持続させることができたとき、人間の生は近代の病を治癒し、統合されて、真なるものとなるだろう」(p. 385)。